

信州の伝統的工芸品

南木曽ろくろ細工

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和55年3月3日指定



南木曽ろくろ細工の概要

18世紀前半には、木地師が南木曽に定着し、名古屋、大阪周辺に木地荷物を出荷していたとされています。江戸時代中期には、白木の挽物がこの地方で生産されていたことが窺われます。

トチ、ケヤキ、セン、カツラなどの広葉樹材をろくろ加工し、拭き漆等をして仕上げしており、天然の美しい木目を生かした実用的な挽物

細工です。

熟練した木地師達が、十分に選び抜いた木材の材質や木味の微細な変化に合わせ、木地鉢、茶びつ、盆、椀などを造り続けています。また、伝統を継承しながら、生活様式の変化や嗜好の多様化に対応した様々な製品を造っています。

【主要産地】 南木曽町



歴史・沿革

南木曽ろくろ細工の起源は明らかではないが、蘭村(現南木曽町)の歴史を記した「勝野文書」に宝永元年(1704年)から享保13年(1728年)の間に、木地師が運上銀を収め、盆・椀等の木地荷物を名古屋・大阪方面に出していたことが記されていることから、江戸時代中期には、白木の挽物がこの地方で生産されていたことが窺われます。

明治初期に至ると、蘭村において木地師、塗物師合わせて15人ほどが椀・盆・茶盆・丸盆等の挽物の製造に従事していたことが、「村誌明細帳(役場文書)」「奥谷文書」等の文献で明らか

かにされていることから、この時代すでに、産地形成していたことが窺われます。また江戸中期にこの地で製造された拭き漆製品が現存していること、及び塗物師がいた事実から、木地の木目等を活かした拭き漆の技術が確立していたと考えられます。

明治中期になると、それまでの手引きろくろに代わって水車を動力としたろくろが使われるようになり、技術・生産高とも向上しました。

明治末期には拭き漆の技術向上のため、輪島から漆職人を招いています。(西筑摩郡誌)

昭和初期には茶盆、茶びつ等を中心とする商品の販路が

全国に及ぶようになりました。当時の大福帳をみると白木製品とならんで拭き漆製品が大量に出荷されていたことがうかがわれます。

昭和22年には電動ろくろも導入され能率もいっそう向上しましたが、一方原木が周辺に乏

しくなり、また不便な交通事情等から現状維持の状態がしばらく続きました。しかしながら手づくりの良さ、木製品の味が次第に見直されるようになり、現在に至ります。



産地の取組

原木の森づくり

原木が乏しくなったことから、「南木曽伝統工芸の森」をつくり、植樹をし、原木の育成を進めています。

良い原木を育成することが、良い製品作りにつながることから、木地師が協力して、森の育成に取り組んでいます。



南木曽ろくろ祭り

毎年、11月のはじめに、「ろくろ祭り」を開催しています。

漆畑の山の神に奉納の後、木工芸職人展やろくろ製品の修理なども引き受けています。秋の木曽路の景色と、伝統的工芸品の南木曽ろくろ細工の素晴らしさをお伝えしています。



アクセス



●中津川ICから車で40分 ●飯田ICから車で50分

南木曽ろくろ工芸協同組合

〒399-5302 長野県木曽郡南木曽町吾妻4689

TEL0264-58-2434 FAX0264-58-2434

◎拭き漆の皿と白木製品の椀



◎白木製品のこね鉢



◎どんぐり型の拭き漆椀



◎拭き漆椀



◎茶筒



◎木目を生かした花器



◎ボールペン



◎オーディオ用高級スピーカー



職人の個性が、 美しい木目の製品を生み出す

南木曾ろくろは、木目の美しさが命です。原木から素材となる材料をどのように切り出すかは、職人の腕の見せ所です。それぞれの個性、独自の技術から、様々なろくろ製品を生み出しています。

地元のお店をいろいろと回ると、お気に入りのろくろ製品を見つけていただけだと思います。



原木から綺麗な木目を切り出す

◆玉切り



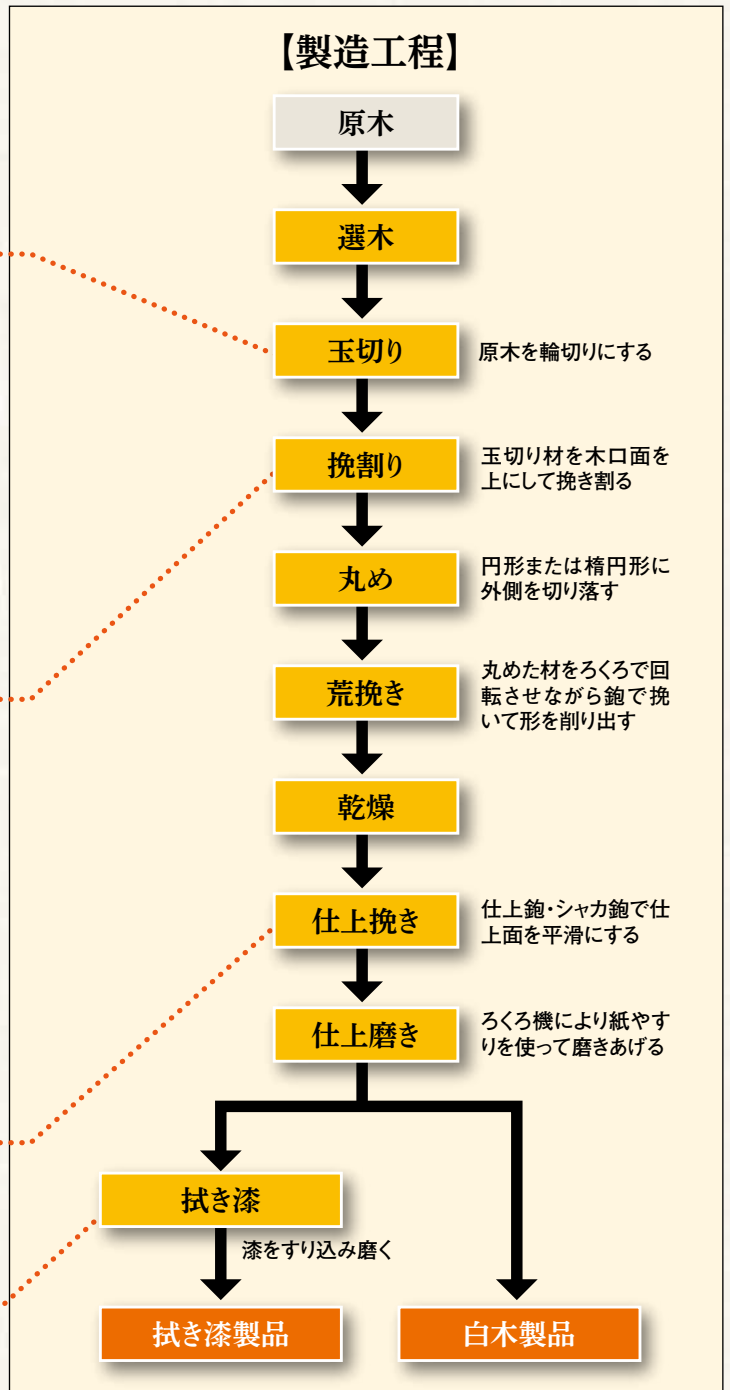
◆挽割り



◆仕上挽き



◆拭き漆



技 鉋の刃を鍛えるところから、製造、販売まで

南木曾ろくろ細工は、ろくろ挽き工程はもちろん、選木、木取りから塗装、鉋の鍛えに至るまでの全作業を一人の熟練職人の手で行い、完成度を高めています。

鉋の刃を、自分で鍛えることができないければ、一人前の職人とは言えません。道具から自分で製作し、ろくろ製品を製造、販売することから、製品に対する思い入れは人一倍あります。



鉋の刃を鍛えている